

身体の動きが不器用な幼児に関する研究

守 渉¹

ぎこちない動きをする子どもや保育者が不器用だと感じる子どもが増えたと言われて久しい。本研究では、保育士が不器用だと感じる子どもの特徴や配慮事項など、保育士の実態を把握することを目的に、WEBアンケートを実施した。保育士が不器用だと感じる視点を整理するとともに、配慮事項を明らかにした。配慮事項に関しては自由記述で内容を質問し、計量テキスト分析KH Coderを使用し分析を行った。その結果、不器用と感じる子どもの行動項目に「指先で小さなものをつまめない」「はさみをうまく使えない」などの主に手や指先を使う場面を指すものが上位となり、製作活動等の一斉での活動の際に課題が表面化していることがわかった。このことから、保育士は一斉での活動の際に子どもの不器用さに着目する傾向があることが示された。また、「着替えなどに時間がかかる」の項目も、高い割合を占めており、保育中に頻度の多い生活習慣に関わる行動などに目が向きがちになる傾向であった。そして、保育士は基本的な生活習慣、製作活動、遊びにおけるどの場面でも高い割合で配慮しているということが明らかになった。

Keywords : 身体的不器用さ、ぎこちない子どもの動き、保育園、保育士

I はじめに

近年、ぎこちない動きや保育者が不器用だと感じる子どもが増加している。具体的には、保育の場で、ケンケンやスキップが年齢相応にできない、5歳児でも箸がうまく使えない、手先が不器用で着脱に時間がかかる子どもが増えている¹⁾。また、「片足跳びができない」「ハサミや箸が上手に使えない」「靴の紐が結べない」などの日常生活での動作の問題、不器用さが気になる保育者が多い²⁾。子どもの生活習慣の獲得や就学後の運動能力を問題にする上でも、また、特別支援を要する保育を考える際にも、幼児期の身体的不器用さについて関心が高まってきている。

このような子どもについて保育者は日常の保育現場で早期に違和感を抱き、「気になる」子どもの特徴として捉えている³⁾。保育者が気になる子どもの多くは、①言葉の表出や理解の知的機能、②対人関係や基本的な生活習慣の形成などの社会性からの評価が大半を占める。一方、気になる子どもの中には①②の課題はないものの、「姿勢が崩

れやすい」「力の加減がわからない」等の手先や身体を思うように動かすことができない子どもがいる。身体感覚の偏りは個人の努力不足ややる気の問題として捉えられることが多く、子どもが困っていても周囲の理解が得られない状況にある。

現代の子どもの不器用でぎこちない動きは、現代社会の産物として手足を中心とした全身を使わなくなったことへの警鐘でもある。また、このような子どもが多く存在しても、成長を重ね、大人になれば解消されると楽観的に捉える風潮があったのかもしれない。しかしながら、このような問題が最も前面に出てくるのは、学業の遂行度を問われる学齢期になってからである⁴⁾。小学校入学後、手先の不器用さから学習の進度についていけなくなるなどの問題が表面化してくると自分の不器用でぎこちない動きからますます自信を失くしてしまう。そのため、問題が明らかになる前の幼児期から適切な支援をすることの必要性が問われるべきである。

身体測定や運動能力テストなどは、測定した数値としてその年次的な変化が把握でき、傾向を掴むためにわかりやすい尺度となる。しかし、数値

1. 宮城学院女子大学教育学部教育学科

で表現できない機能面での評価や行動に関わる事項の評価は、保育者たちの主観的な判断に任されている。例えば、運動遊び場面での動きについて、ある年齢にしては滑らかな動きではないことや何処となく危なっかしいなど、いわゆるぎこちない動きを客観的に数字で表すことは難しい。原らは、子どもが歩いたり走ったりする動作を観察したとき、発育・発達の個人差を考慮した上で、それでもなおこの発達段階における子どものあしの運びとしては不自然さがあると気になる⁵⁾と指摘している。ぎこちなさの根底にあるものを具現化することは、子どもたちの健やかな成長に関わる者が今後の支援の在り方を考えるうえで役立つのではないだろうか。また、二次的に発生するケガや障害の防止、運動嫌いの子どもの増加に歯止めをかけることの一助になり、子育てに不安を感じながら育児をする親たちの役にも立てることになる⁶⁾と考えられる。

なお、本研究における身体的な不器用さとは、奥田の「高次で合理的な運動において極度に不正確あるいは低レベルのパフォーマンスしか発揮できない子どもの運動行為⁷⁾」を指すものとする。

II 研究目的

前述したように、保育者は日常的に動きがぎこちなく、不器用な子どもへの関わりに苦慮していることが予想される。不器用さは年齢の上昇に伴って自然に消滅していくものと考えられてきたが、一部の子どもは、年齢が進んでも容易に改善しない現状がある。そういった子どもは、失敗経験を重ね就学後も自尊感情を下げってしまう可能性もある。また、対人関係形成や集団参加に影響を及ぼし、周囲の人々のその子どもに対する評価を必要以上に下げってしまう。

動きがぎこちなく、不器用さの問題は、親の主訴になることは少なく、保育者からであることが多い。これは、集団での観察により、言葉よりも行動面に目につきやすく、特に、体操、製作の「できる」「できない」の評価が指導者側からわかりやすいからだとする指摘もある⁸⁾。一方で、保育

者は早い段階から子どもの不器用さに気が付いてはいるものの、理解力など多様な選択肢があることから問題の所在を特定することができない現状があると考えられる。

そこで、本研究では、保育士が、動きがぎこちなく、不器用だと感じる子どもの特徴や配慮事項など、保育士の実態を把握することを目的に、WEBアンケートを実施する。アンケート調査により、保育士が日頃の保育で感じている視点を整理できるとともに、保育士が不器用だと感じる子どもの傾向や気になるぎこちない動き、当該児への配慮事項の傾向を明らかにする。

III 研究方法

1 研究の方法と手続き

調査協力園の園長に依頼し、保育士にアンケートの概要を示した用紙と研究同意書を配布してもらった。概要を示した用紙にQRコードを記し、Google フォームによるWEBアンケートで実施した。

2 調査対象

園庭が広く、かつ自然豊かで身体を十分に動かすことができる宮城県内の調査協力園（5園）に依頼した。園長や副園長などの管理職をはじめとする、すべての保育士を調査対象とした。

3 調査期間

2021年5月下旬に調査協力園にアンケート調査用紙を配布し、2021年9月までWEBでアンケートを実施した。

4 アンケート項目・調査内容

アンケート項目は、①不器用だと感じる子ども（17項目から構成され、3つまで選択）②基本的な生活習慣③製作活動④身体の動きや身体を使った遊び⑤難しいこと・困っていること⑥不器用だと感じる子どもの保護者との連携について回答を求めた。①に関しては、水野らの先行研究を参考に、17項目から構成されている不器用に関連す

る行動を採用した(表1)⁹⁾。ただし、項目素材の特性上、「どれも不器用な行動」と判断・返答が一律に為される可能性も予測されたため、多重回答方式を採用した。

表1 不器用に関連する行動の3領域

領域	項目
① 基本的な生活習慣の領域 衣・食・住の基本的な生活習慣に関わる行動	<ul style="list-style-type: none"> ・着替えなどに時間がかかる ・洋服の前後を間違えて着る ・雑巾やおしぼりをうまく絞れない ・コップの水などをよくこぼす ・お菓子の袋を破れない
② 作業の領域 保育場面における製作の中でみられる行動	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を作るのに時間がかかる ・閉じた丸が描けない ・はさみをうまく使えない ・指先で小さなものをつまめない
③ 運動の領域 日常生活での体の動きや体を使った遊びの中でみられる行動	<ul style="list-style-type: none"> ・ぎこちない走り方をする ・階段を一步一步交差のパタンで下りられない ・まっすぐに走れない ・からだの動きがスムーズでない ・ボールつきがうまくできない ・連続ジャンプができない ・スキップができない(4歳以上) ・リズムうちが苦手である

5 分析の方法

それぞれの項目の配慮事項の有無に対しては、「よくある」「ある」「あまりない」「まったくない」の4件法とした。「よくある」「ある」を答えた保育士には、配慮事項を自由記述で内容を質問した。なお、自由記述は計量テキスト分析KH Coderを使用し分析した。逐語録に出現する語を計量的手法により抽出・整理し、さらに、ここで得られた語のうち、特に頻出する語(以下、抽出語)を抽出・整理してその出現傾向を検討した。抽出語について共起ネットワーク分析を行い、そこで得られる文脈から配慮事項を検討する。KH Coderには、ある文字列(単語)が出現した位置を検索し、その前後の文字列との関連から文脈を確認できるKWICコンコーダンス機能(以下、コンコーダンス)がある。コンコーダンスを使用し、自由記述の文脈を探った。

6 倫理的配慮

調査協力園の園長、保育士に対しては、研究の趣旨と倫理的配慮等について文章及び口頭で説明した。回答の強制は行わず、アンケートの回答を

もって同意が得られたこととした。また、アンケートは無記名とし、収集したデータについては個人を特定できない形で分析を行った。

IV 結果

回答者の保育士41名のうち性別は、男性14.6%(6名)、女性85.4%(35名)だった。また、回答者の年齢では、20~24歳が最も多く24.4%(10名)、次いで30~34歳が19.5%(8名)、40~44歳17.1%(7名)、50~54歳12.2%(5名)となった(表2)。勤務先は、公立保育所が29.3%(12名)、私立保育園が68.3%(28名)、認証保育所が2.4%(1名)であった。また、保育士の平均経験年数は13.51年(SD=10.42)となった。

役職は、園長が4.9%(2名)、副園長7.3%(3名)、主任(副主任)が9.8%(4名)、主任保育士が7.3%(3名)、学年主任(乳児、幼児リーダー)が2.4%(1名)、クラス担任が61.0%(25名)、フリー保育士4.9%(2名)、一時預かり2.4%(1名)であった(表3)。

表2 年齢と性別

	人	%	
性別	男性	6	14.6
	女性	35	85.4
年齢	20~24歳	10	24.4
	25~29歳	2	4.9
	30~34歳	8	19.5
	35~39歳	1	2.4
	40~44歳	7	17.1
	45~49歳	4	9.8
	50~54歳	5	12.2
	55歳以上	4	9.8

表3 勤務先と役職

	人	%	
勤務先	公立	12	29.3
	私立	28	68.3
	認証保育所	1	2.4
役職	園長	2	4.9
	副園長	3	7.3
	主任(副主任)	4	9.8
	主任保育士	3	7.3
	学年主任(乳児、幼児リーダー)	1	2.4
	クラス担任	25	61.0
	フリー保育士	2	4.9
	一時預かり	1	2.4

不器用な子どもと言っても年齢によって想定する子どもの姿が変わると思われるため、イメージした子どもの年齢を質問項目に設定した。その結果、年長が48.8% (20名)、年中が26.8% (11名)、年少が24.4% (10名) となった (表4)。

表4 イメージする子どもの年齢

	人	%
年少	10	24.4
年中	11	26.8
年長	20	48.8

保育士が不器用だと感じる子どもの行動の項目 (図1) は、主に手や指先を使う場面を指すものが上位となった。多い順に「指先で小さなものをつまめない (36.6%)」、「はさみをうまく使えない (31.7%)」、「着替えなどに時間がかかる (26.8%)」であった。次いで多かった項目は、「からだの動きがスムーズでない (26.8%)」や「ぎこちない走り方をする (19.5%)」などの運動の領域の内容であった。

不器用な子どもたちに対し、園生活の基本的な生活習慣 (着替えや食事等) において、配慮していることの有無は、「よくある (14.6%)」、「ある (63.4%)」、「あまりない (19.5%)」、「まったくない (2.5%)」であった (表5)。製作活動において、配慮していることの有無は、「よくある (14.6%)」、「ある (70.8%)」、「あまりない (14.6%)」、「まったくない (0%)」であった (表6)。日常生活での身体の動きや身体を使った遊びにおいて、配慮

表5 園生活の基本的な生活習慣 (着替えや食事等) において配慮していること

	人	%
よくある	6	14.6
ある	26	63.4
あまりない	8	19.5
まったくない	1	2.5

表6 製作活動において配慮していること

	人	%
よくある	6	14.6
ある	29	70.8
あまりない	6	14.6
まったくない	0	0

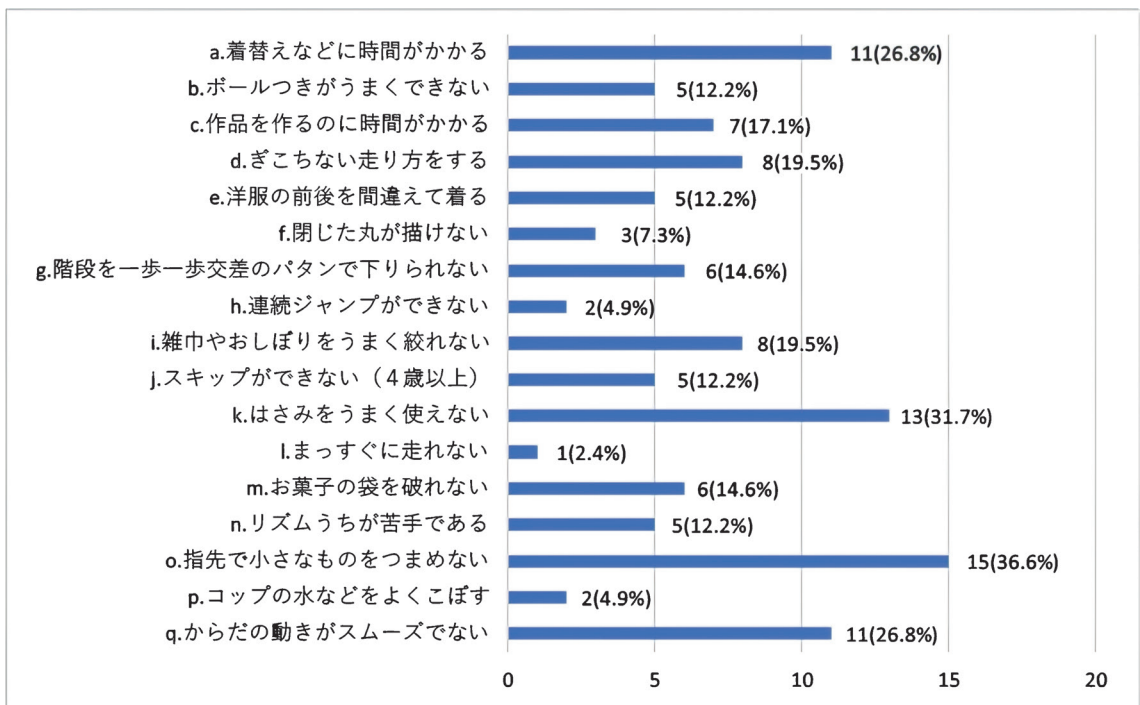


図1 不器用だと感じる子どもの行動の項目

していることの有無は、「よくある (7.3%)」、「ある (73.2%)」、「あまりない (19.5%)」、「まったくない (0%)」であった (表7)。

不器用な子どもを保育していて、難しいと感じたり、困ったりすることの有無は、「よくある (4.8%)」、「ある (41.5%)」、「あまりない53.7%」、「まったくない (0%)」であった (表8)。50%以上の保育士は何らかの理由による困りごとはない現状となった。

不器用な子どもに対し、保護者と連携したり、保護者をお願いをしたりすることの有無は、「よくある (4.8%)」、「ある (53.7%)」、「あまりない (41.5%)」、「まったくない (0%)」であった (表9)。保護者との連携を視野に入れた対応をしている保育士が半数以上を占めた。

表7 日常生活での身体の動きや身体を使った遊びにおいて配慮していること

	人	%
よくある	3	7.3
ある	30	73.2
あまりない	8	19.5
まったくない	0	0

表8 難しいと感じたり、困ったりすること

	人	%
よくある	2	4.8
ある	17	41.5
あまりない	22	53.7
まったくない	0	0

表9 保護者と連携したり、保護者をお願いしたりすること

	人	%
よくある	2	4.8
ある	22	53.7
あまりない	17	41.5
まったくない	0	0

V 考察

1 不器用だと感じる子どもの行動の項目

不器用だと感じる子どもの行動の項目で回答が多かった、「指先で小さなものをつまめない」や「は

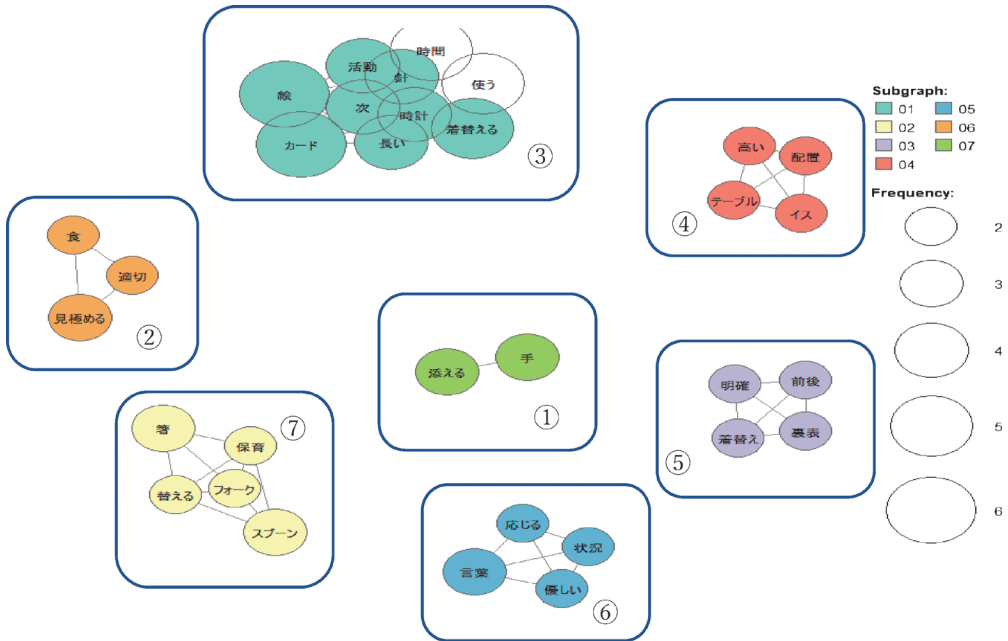
さみをうまく使えない」といった項目は保育場面でも多く見られ、これらは、製作活動などの一斉での活動の際に表面化しやすい課題である。このことから、保育士は一斉での活動の際に子どもの不器用さに着目する傾向があると思われる。個別的 (1対1) に支援をして不器用さを補うようにするというよりは、一斉での活動 (集団で動く時間) において不器用さを認識し、個別的な対応をしている傾向があるのではないかと。

「着替えなどに時間がかかる」も、26.8%と高い割合を占めており、川島らが行った調査結果¹⁰⁾と同様であった。「着替えなどに時間がかかる」と同数の「からだの動きがスムーズではない (26.8%)」は、運動領域において最も多い割合を示していた。本来であれば不器用だと感じる子どもの行動として結びつきやすい項目であると考えられていたが、保育中に頻度の多い着替えなどの生活習慣に関わる行動や設定された作業場面における行動に保育士は目が向きがちになると考えられる。

2 基本的な生活習慣、製作活動、身体の動きや身体を使った遊びにおける配慮について

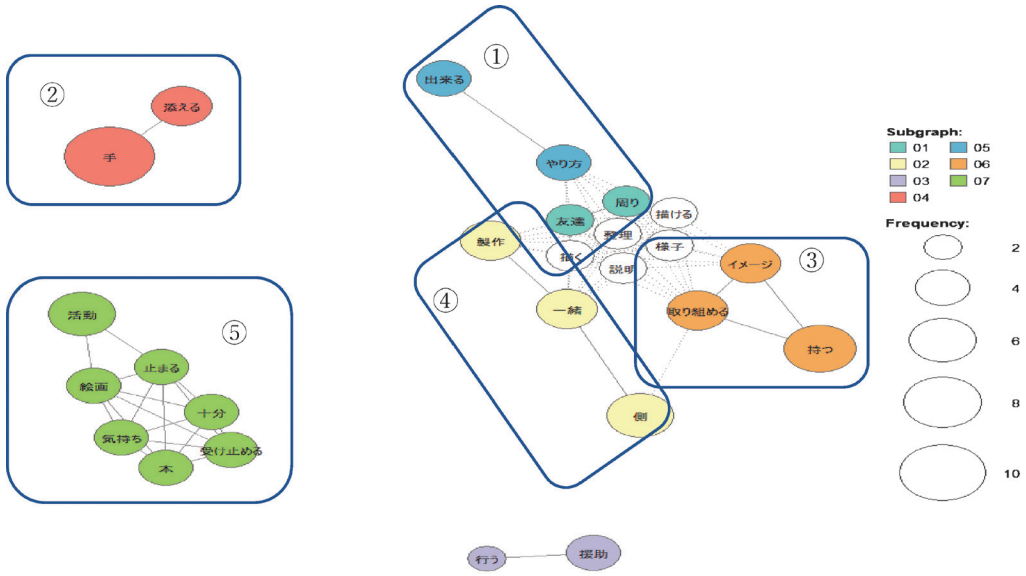
園生活の基本的な生活習慣 (着替えや食事等)、製作活動、日常生活での身体の動きや身体を使った遊びにおいて、配慮していることが「よくある」「ある」と回答した割合は、生活習慣で78%、製作活動で85.4%、身体を使った遊びで80.5%となり、どの場面においても高い割合で配慮しているということが分かった。

園生活の基本的な生活習慣 (着替えや食事等) や製作活動において配慮している事項は、手を添えるや視覚支援、イメージが持てるようにするなどの特別支援教育の支援が取り入れられていた (図2、3)。また、製作活動における配慮では、達成感を味わうようにする傾向があった。不器用さを示す場合、低い自己肯定感や高い不安感、対人的困難など心理社会的問題がみられる¹¹⁾とされている。製作課題に対する意欲が低下し、自己肯定感の低下につながるような情緒面へのフォローが見られた。



602文字（異なり語数188文字）文56段落47
 ①手を添える ②丁寧に検討する ③視覚支援をする ④物的環境を整理する
 ⑤衣服の裏表を明示する ⑥丁寧に言葉かけをする ⑦発達に応じて食具を替える

図2 基本的な生活習慣の配慮についての自由記述の共起ネットワーク



726文字（異なり語数201文字）文40段落32
 ①達成感を味わうようにする ②手を添えて取り組む ③イメージが持てるようにする
 ④やりたいことを探る ⑤やりたくなかった時は気持ちを受け止める

図3 製作活動の配慮についての自由記述の共起ネットワーク

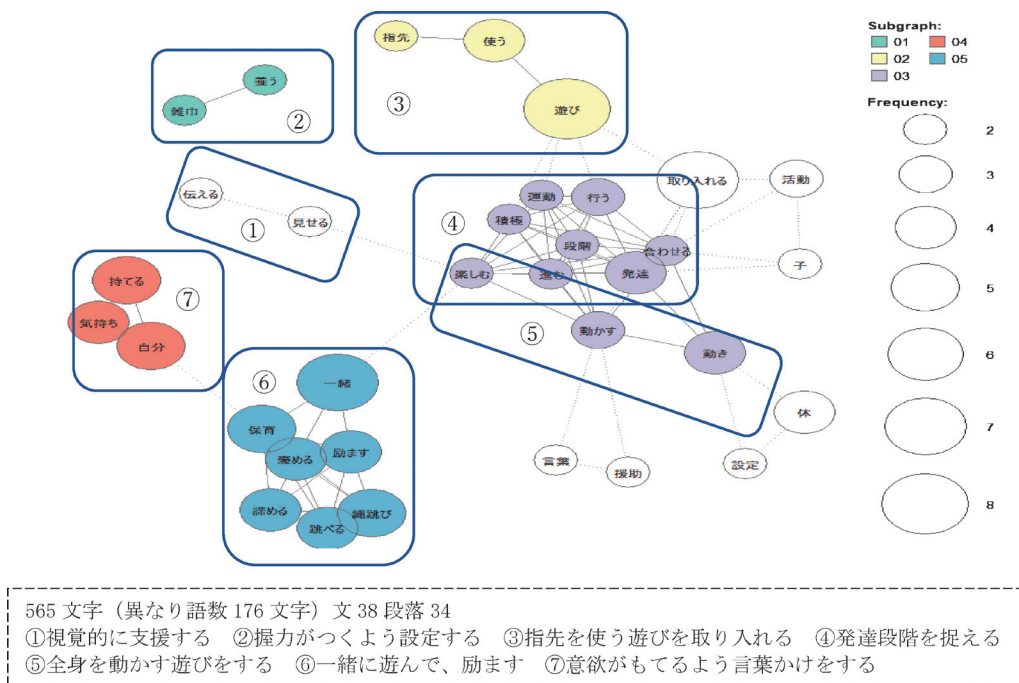


図4 身体の動きや身体を使った遊びにおける配慮についての自由記述の共起ネットワーク

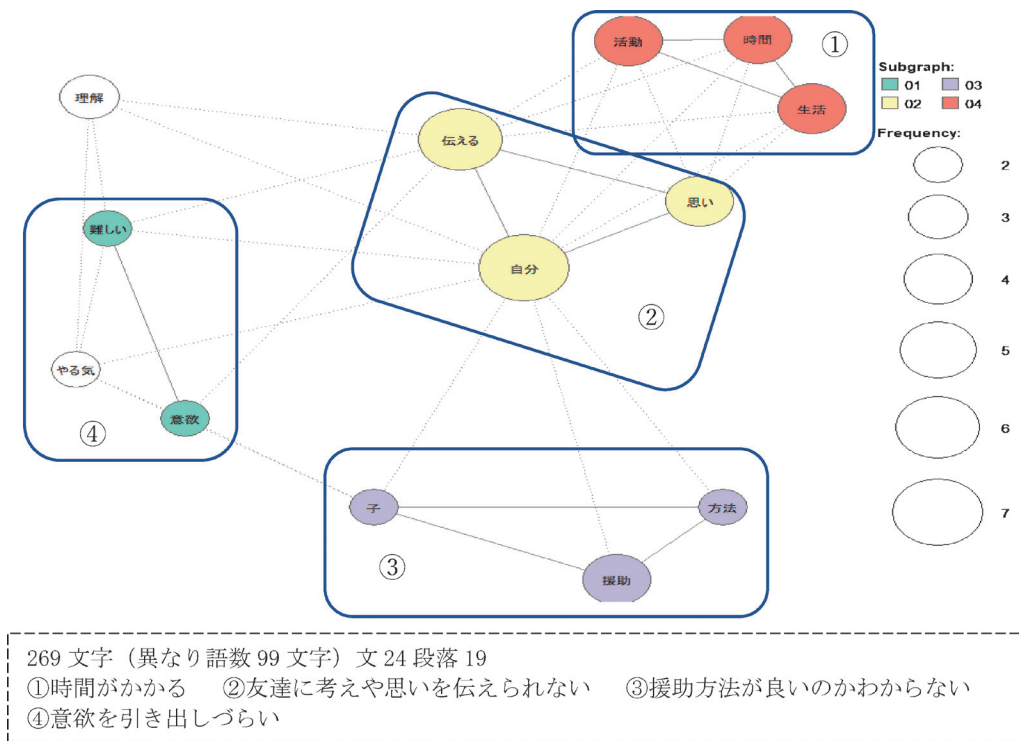
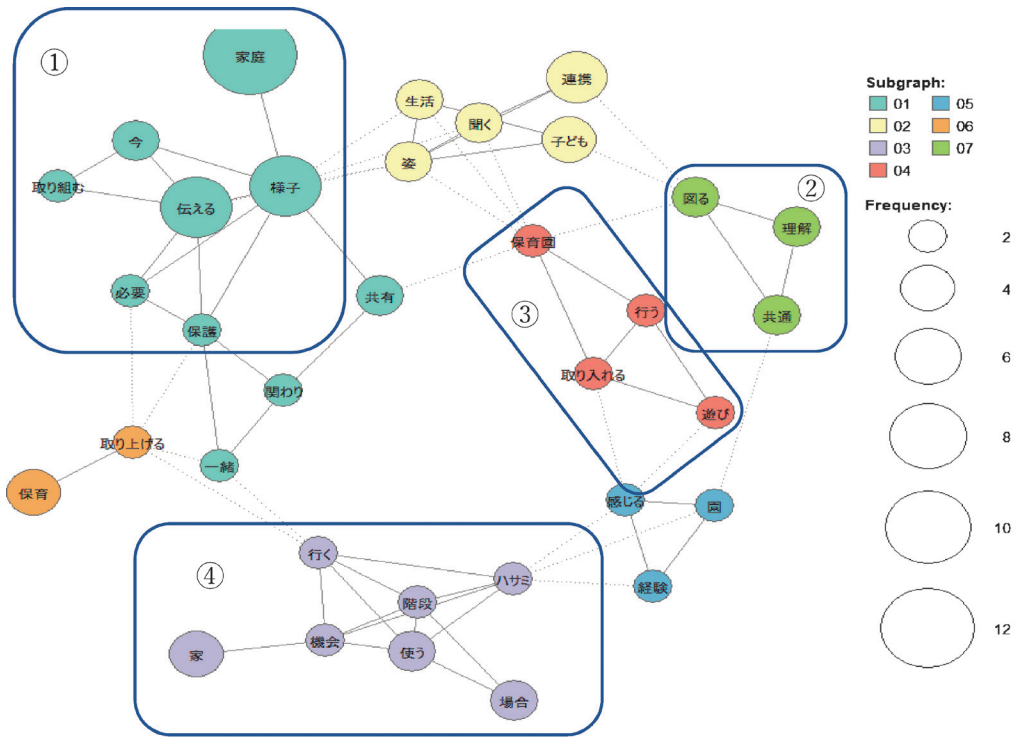


図5 難しいと感じたり、困ったりすることについての自由記述の共起ネットワーク



544文字（異なり語数179）文23段落19
 ①取り組んでいる内容や様子を伝える ②家出の生活を聞いて、共通理解を図る
 ③家でやっていることを園でもする ④園でやっていることを家でもしてもらう

図6 保護者と連携したり、保護者をお願いをしたりすることについての自由記述の共起ネットワーク

身体の動きや身体を使った遊びにおいて配慮している事項では、発達段階を考慮した内容や、握力がつくような設定、指先を使う遊びを取り入れるなどといった内容があげられている(図4)。このことは、不器用だと感じる子どもの行動の項目で上位であった手や指先を多く使う場面を指すものとの関連が示された結果である。

3 不器用な子どもの保育で感じること

不器用な子どもを保育していて、難しいと感じたり、困ったりすることが「よくある」「ある」は合計46.3%であった。一方、「あまりない」は53.7%と半数を越える割合を示した。0~5歳児についてその場に応じた援助の在り方がそれぞれの園で蓄積されている中で、保育士が不器用さに対

して、援助を適宜変化させていると思われる。難しいこと、困っていることについての事項では、時間がかかるや友だちに考えや思いを伝えられないという記述があった(図5)。このことは今後、連合遊びや協同遊びなどの集団遊びへの発展につながりやすくなると考えられる。幼児期は、一人遊びの世界を、他者と分かちあう遊びの世界へと発展していく契機¹²⁾でもある。自分の考えや思いを伝えながら他者と関わることは子どもの社会性を育む上でも必要なことになる。

4 保護者との連携について

保護者と連携したり、保護者をお願いをしたりすることが、「よくある」「ある」の合計が58.5%となり、家庭との連携を意識する保育士が多いこ

とがわかる。具体的には、家庭で取り組んでいることを園でも実施、園で取り組んでいることを家庭でも実施してもらうなど、双方で実践することを念頭に入れている記述があった(図6)。園と家庭の取り組み方に違いが生じないようにする配慮と考えられ、子ども自身が混乱しないような援助と考えられる。また、取り組んでいる内容や様子を保護者に伝えるといった間接的なやり取りだけではなく、家でも実施してもらう機会を設けるといった直接的な内容も見られた。

VI おわりに

本研究では、不器用と感じる子どもの行動項目の回答で、「指先で小さなものをつまめない」「はさみをうまく使えない」などの主に手や指先を使う場面を指すものが上位となり、製作活動等の一斉での活動の際に課題が表面化していることがわかった。このことから、保育士は一斉での活動の際に子どもの不器用さに着目する傾向があることが示された。また、「着替えなどに時間がかかる」の項目も、高い割合を占めており、保育中に頻度の多い生活習慣に関わる行動などに目が向きがちになる傾向であった。そして、園生活の基本的な生活習慣(着替えや食事等)、製作活動、日常生活での身体動きや身体を使った遊びにおいて、配慮していることに関する回答では、どの場面においても高い割合で配慮しているということが明らかになった。

保育者は、保育場面における不器用さに関連する行動を「気になる」子どもの特徴の一つとして捉えており¹³⁾、子どもの不器用さやぎこちない動きが保育者の気になる要因ともなっていると考えられる。今回のアンケート項目の基本的な生活習慣や製作活動の場面で主に該当する手の動作に関わる不器用さは、子どもが課題に取り組む時間を延長させる可能性が高く、集中力を持続できない状況となる。さらにクラスなどの活動で、顕在化する不器用さは、クラス活動からの遅れにとどまらず、課題などに対する意欲が低下し、自己肯定感の低下にもつながると考えられる。

また、身体動きや身体を使った遊び場面における子どもの不器用さやぎこちない動きについて、川島らは、低い運動パフォーマンス自体を一次的影響と言いつつ、そしてそのことによる運動への消極的参加や自己並びに他者評価の低さを二次的影響¹⁴⁾としている。思いきり遊びたいと思うがそれができず、失敗経験を重ねて自尊感情を下げてしまうととも、対人関係形成や集団参加に影響を及ぼし、周囲の人々のその子どもに対する評価に影響を与えてしまう。保育園や幼稚園だけの問題ではなく、就学後の学習への影響も考えられる。不器用さやぎこちない動きは適切な支援のもとで運動に参加することで解消されることも可能となるため、運動遊びへの参加の機会を増やし、具体的な遊びの支援の創造・構築が必要である。

このように不器用さを示す子どもの低い自己肯定感や高い不安感、あるいは対人的困難などの心理社会的問題は、子どもの不器用さの特徴が直接影響しているというよりも、その対応から生じる問題であると考えられる。子どもの不器用さをできるだけ早く把握し、保育者同士が連携を図りながら、保育中の適切な声かけや具体的なサポートが欠かせない。保育活動における課題に対する期待水準や自己肯定感を高めるための支援のあり方を検討すると同時に、そもそも二次的な問題が生じないような予防的支援の充実が求められる。そして、家庭での支援方法の検討も重要となり、保護者との連携がより一層求められる。

本研究では、保育者を対象とした調査研究を実施したが、不器用な動きなどの捉え方は、保育観や経験年数などが影響するとも考えられる。不器用な子どものニーズを的確に捉えるためにも、観察による実証的研究などによるアプローチも必要であると考えられる。

付記

本研究のアンケートに協力してくださった保育所・保育園の先生方に深く感謝いたします。

文献

- 1) 井口均 (2000) 「保育者が問題にする『気になる子』についての傾向分析, 長崎大学教育学部紀要教育科学, 59, pp.1-16.
- 2) 村井憲男・村上由則・足立智昭 (2001) 「気になる子どもの保育と育児」, 福村出版, pp.1-174.
- 3) 水野友有・平野華織・別府悦子 (2013) 「幼稚園・保育所における『気になる』子どもの実態調査 (第3報) —『気になる』子どもの不器用さに関する分析による検討」, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 14, pp.75-80.
- 4) 尾崎康子 (2019) 「手先の不器用さをもつ幼児に対する家庭や保育での工夫」, こころの科学, 207, 日本評論社, p.85.
- 5) 原英喜・内田雄三・小原晃・笠原悦夫・嶋崎博嗣・高橋弥生・根岸雅美・藤井喜一・村越晃・深沢寿美枝 (2004) 「『ぎこちない子どもの動き』に関する調査研究」, 身体運動文化研究 11 (1), pp.57-70.
- 6) 前掲書 5)
- 7) 奥田援史 (2007) 「幼児の身体的不器用さに関する研究」, 滋賀大学教育学部紀要教育科学, 57, p.1.
- 8) 川島民子・奥田援史 (2017) 「幼稚園における幼児の不器用さの実態」 滋賀大学教育学部研究紀要教育科学, 67, pp.101-107.
- 9) 前掲書 3)
- 10) 前掲書 8)
- 11) Schoemaker M.M., and Kalverboer, A.F. (1994) Social and affective problems of children who are clumsy: How early do they begin. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 11, pp.130-140.
- 12) 村瀬嘉代子 (2009) 「孤独な遊びから分かちあう遊びへ」, そだちの科学, 12, 日本評論社, p.111.
- 13) 前掲書 3)
- 14) 川島民子・奥田援史 (2019) 「幼児の身体的不器用さの特徴に関する研究」 滋賀大学教育学部研究紀要教育科学, 69, pp.45-52.